

【泉芳朗像】



(奄美市)

【断食祈願を行う泉芳朗】



(安陵会所蔵)

奄美復帰運動の父

泉芳朗

一九五一年（昭和二十六年）八月五日、奄美の暑い夏の夜が明ける頃、名瀬市（現在の奄美市名瀬）の高千穂神社の境内は、各地から続々と駆けつけた、一万人余りの人々の熱気に包まれていました。

彼らは、その日までの五日間にわたり、社殿で断食を行っていた人物の姿を、一目見たいと思っていたのです。その人物は、しっかりとした足どりで拝殿の階段に立ち、集まった群衆を前に、自作の詩を朗読しました。

ここは北緯二十九度直下 奇妙不可解な人為の緯線が
のろわれた民族の死線に変わろうとしている

その人物の名は、泉芳朗。彼が断食祈願を行ってまで

【断食】
一定期間、自発的に食物を断つこと。

泉が断食祈願中に書いた詩
表題は「断食悲願」。

願ったこととは、何だったのでしょうか。

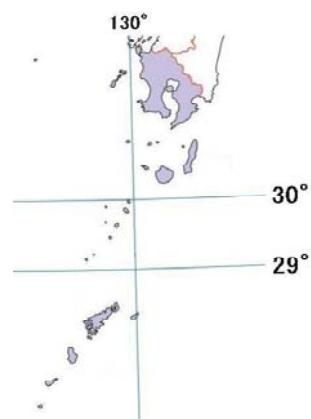
さかのぼること六年前の一九四五年（昭和二十年）八月十

五日、第二次世界大戦が終戦を迎えました。ポツダム宣言を受け入れた日本は、連合国軍に占領されたのです。

そして、翌年の二月二日、連合国は、北緯三十度以南の口之島くちのしまから奄美諸島及び琉球諸島りゅうきゅうを日本から分離し、米軍の直接占領下に置くことを決定しました。この日を境に、これらの島々の人々は、日本本土と自由に行き来することができなくなったのです。

本土と切り離され、生活に必要な物資が入ってこなくなったことで、奄美をはじめとする人々の食糧不足しょくりようは酷ひどくなる一方でした。戦後で、これといった仕事もありません。生きていくため、本土に仕事を求めて密航したり、特産の黒糖を本土で売って食糧を手に入れ、それを

【北緯三十度線】



【本土】

当時、北緯三十度以北は、「本土」と呼ばれた。



【関連年表】

- 一九〇五年 誕生
- 一九二四年 鹿児島県立第二師範学校卒業
同年、赤木名小学校に勤務。
- 一九二五年 古仁屋小学校勤務。
- 一九二六年 母校、面縄小学校勤務。
- 一九二八年 上京し、千駄ヶ谷小学校勤務。
- 一九三九年 徳之島へ帰郷。
- 一九四一年 伊仙国民学校に勤務。
- 一九四三年 神之嶺国民学校校長。
- 一九四五年 ポツダム宣言。
- 一九四六年 大島郡の視学となる。

持ち帰るために更に密航をしたりする人々もいました。

また、本土では、一九四七年（昭和二十二年）に日本国憲法が施行され、新しい教育が始まりましたが、奄美には新しい教科書すら入ってきませんでした。本土と同じ教育を奄美の子どもたちにも行おうと、小学校と中学校の教師が、新しい教科書を手に入れるために命がけで本土に渡ったこともありました。

奄美の人々は、日本本土と切り離されて以降、復帰を果たすために様々な努力をしてきましたが、その願いは叶えられていませんでした。

そのような中、アメリカは一九五〇年（昭和二十五年）に入り、日本を独立させるための講和条約の準備を進めていました。しかし、この講和条約の草案の内容は、「北緯二十九度以南の南西諸島を米軍の信託統治下に置く。」

【調べてみよう】

占領下の人々の暮らしと、今の私たちの暮らしを、比べてみよう。

一九五一年

奄美大島復帰協議会議長に就任。

一九五二年

名瀬市市長に当選。

一九五三年

奄美群島が日本に復帰。

一九五九年

死去

というものであり、このまま条約が結ばれると、奄美の復帰は更に困難になります。

「生活が苦しい。早く日本に帰りたい。」「日本人を日本に帰せ。」という人々の強い思いは日に日に高まり、一九五一年（昭和二十六年）二月に、奄美大島日本復帰協議会が結成されます。その初代議長に就任したのが、泉芳朗でした。

泉は、元々は小学校の教師で、神之嶺小学校（当時は神之嶺国民学校）の校長になった後に、大島地区の視学しがくに任用され、教師達の指導を行いました。また、視学を辞めてからも、詩人として各地の青年団や婦人団体に文学の指導を行い、誰だれに対しても親身になって相談に応じる包容力のある人柄が、周囲の信頼しんらいを集めていました。

しかし、その一方で、「金儲けにならない仕事は、泉に任せておけ。祖国復帰なんて実現できない。」との冷

【三島村と十島村】

現在の鹿児島郡三島村と鹿児島郡十島村は、この時、北緯三十度線で分断され、口之島以南が連合国軍の占領下となった。

【視学】

戦前の日本の教育行政官。各学校の視察や指導監督を行っていた。

【署名運動の様子】



(奄美博物館所蔵)

やかな声や、「血を流さずして、本当に祖国復帰できるだろうか。空襲のような酷い目に遭わされたりしないだろうか。」という不安の声があったのも事実です。そのような中で、議長となった泉は、周囲の人々に「復帰運動は、民族運動であり、民族運動は暴力に訴えてはいけない。」「我々の復帰運動はあくまで、平和主義でいこう。非暴力主義でいこう。無抵抗の抵抗でいこう。」と訴えました。

復帰運動の第一歩は署名運動から始まり、また、署名運動と並行して、当時の日本政府やマツカーサー元帥等への電報による陳情活動も行われました。

一九五一年（昭和二十六年）七月に初めて開催された祖国復帰総決起大会では、会場の名瀬小学校校庭に、市民一万人余が集まります。開会直前に米軍による猛烈な反対を受けましたが、泉は、

【署名運動】

記録によると、わずか三か月で、十三万九千三百四十八人の署名が集まったとされている。

「この郡民あげての祖国復帰への純粋な願いは、だれも、また、どんな力をもってしても抑えることはできない。

日本人は日本に帰して欲しいということを、ただ必死に訴えているのです。」

と一歩も引きませんでした。

こうして、奄美諸島の全ての人々を巻き込みながら、運動は日を追って勢いを増していき、その後、各地での祖国復帰決起集会は、計二十七回にわたって開かれることとなります。

一九五一年（昭和二十六年）八月に名瀬市で開かれた決起集会で、泉は、「祖国復帰の民族的悲願を、断食で世界に訴えようではないか。」と提案し、まず自ら、高千穂神社で五日間の断食祈願に入りました。

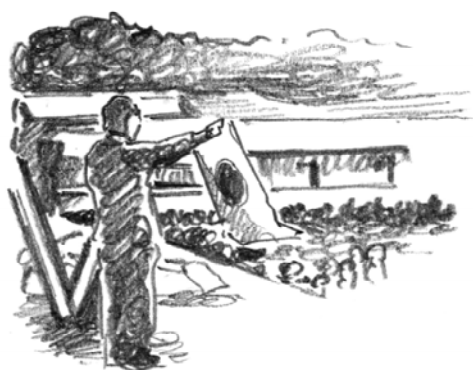
『泉芳朗、断食に入る』

の知らせは、直ちに奄美全島に伝わり、各地で続々と決

起集會が開かれ、小学生から老人までの参加者たちも、その場で二十四時間の集団断食祈願を行いました。この様子は、「奄美のガンジー」として大きく全国紙で取り上げられ、復帰運動が本土の人々にも広く伝えられたのです。

また、アメリカの占領下では、国歌の斉せい唱しょうも国旗の掲揚けいようも禁じられていました。しかし泉は、一九五二年（昭和二十七年）四月、多くの小・中学生や高校生が参加する祖国復帰郡民大会で壇だん上じょうに立ち、ポケットから手製の日の丸の旗を取り出して掲かげ、

「奄美の子どもたちよ。君たちは日本人だ。日本人であることを、決して忘れてはいけない。この旗をしっかりと見なさい。日の丸の旗だ。よく覚えておいて欲しい。決して忘れてはいけない。」



【ガンジー】
インドの独立運動の指導者。
当時イギリスの植民地だったインドで「非暴力・不服従」の独立運動を展開した。一九四八年（昭和二十三年）に七十八歳で暗殺された。

と、声高らかに語りかけました。その後、泉は米軍の厳しい取り調べを受けています。

一九五二年（昭和二十七年）九月、泉は復帰協議会や青年たちの後押しを受け、名瀬市長に選ばれます。就任後すぐに、泉は、当時の鹿児島県知事に復帰を要請するとともに、東京でも吉田茂首相や岡崎勝男外務大臣、アメリカ大使と会見を行い、奄美の祖国復帰を訴えました。

こうして復帰運動が大きく動き出す中、一九五三年（昭和二十八年）八月、アメリカのダレス國務長官が、「アメリカ政府は奄美群島を日本に返還する用意がある。」との声明を発表します。この声明を受けて、奄美では、家々に日の丸の旗が掲げられ、人々の万歳の声^{ばんざい}が沸き上がりました。祖国復帰の願いが、ついに現実のものとなりつつあったのです。

【考えてみよう】
このときの、泉の思いを考えてみよう。

【ダレス声明】
一九五三年（昭和二十八年）、アメリカのダレス國務長官は、韓国からの帰路来日し、東京での記者会見で、奄美群島の返還を発表した。

そして、声明から四か月後の十二月二十五日午前零時^{れい}、奄美群島は日本に復帰を果たします。八年間に及ぶ復帰運動が、やっと実を結んだ瞬間でした。

当時の新聞は、当日の様子を次のように伝えていきます。

「幾百、幾千の顔が泣いている。悲願八年ぶりに奄美大島一市五町十四カ村、二十二万島民は祖国日本のふところ^ろに帰ってきた。昭和二十八年十二月二十五日。この日を二十二万島民は生きている限り忘れることはないだろう。いま、奄美の島々に打寄せる波は祖国に通い、雲間^がくれにのぞく太陽は日本の太陽だ。」

復帰祝賀集会で、泉は叫^{さけ}びました。

「これで八年間の苦悩は一変して、今日、この日の我々は、本当の日本人になったのであります。さあ、みんなで日の丸を掲げ、希望と喜びに、胸を大きく広げて、背骨をしっかり伸ばし、奄美大島復帰万々歳を三唱し、平

【奄美群島返還日米調印】

十二月二十四日、日米間で、奄美群島返還日米協定調印が執り行われた。なお、北緯二十九度以北の口之島から小宝島まで（現在の鹿児島郡十島村）は、この一年前に日本に復帰を果している。

【復帰を喜ぶ泉芳朗】



(奄美博物館所蔵)

和な楽しい郷土復興の第一歩を力強く踏み出そうではありませんか。鹿児島県大島郡バンザイ、バンザイ、バンザイ……」

現在の奄美諸島では、十二月二十五日が「日本復帰記念日」として定められています。そして、丁度クリスマスにもあたる同日には、各地で記念の集いが催され、復帰運動の父として、泉のことも語り継がれています。

「泉先生は、情熱的な詩人でヒューマニストであり、人類愛と燃えるような郷土愛を持った方でした。この思いが、多くの人々の心を揺さぶり復帰運動のエネルギーとなったのでしよう。」

泉と共に復帰運動に携わった経験をもつ奄美の人達は、そんなふうにならぬことを回想しています。

【日本復帰運動発祥の地の石碑】

